

日清戦後の神奈川県自由党

乾 照 夫*

1. はじめに

初期帝国議会において政府に対抗した自由党は、日清戦争を機に、第二次伊藤内閣と提携することをあきらかにした。従来「地租軽減」「民力休養」を標榜してきた自由党が、このように藩閥政府との提携に踏み切ったのは、日清戦後の最大課題であった「戦後経営」に協力して、年来の宿志である政権参入を実現せんとしたからにはほかならない¹⁾。

自由党は、かかる事情から第九議会に先立って、第二次伊藤内閣との提携を宣言した。だが、それは形式の上では党本部の発表であるだけに、その地方支部においても、党本部の「宣言」を支持するか否かを決定し、きたるべき第九議会に対応しなければならない事態となっていた²⁾。ここにおいて日清戦後の問題は、自由党本部に限ることなく、その地方支部においても検討され、結果的には党本部の「宣言」を支持することになりはしたものの、これにより各支部にあっても、日清戦後のありかたをめぐる新たな動向が生じていたものと考えられる。

本稿では、明治28(1895)年12月1日開催の自由党武相支部大会を機として、それまでの「民党」的立場を脱却した神奈川県自由党が、日清戦後の課題にいかに対応したかを見てゆきたい。この点に関しては、前述の「戦後経営」への対応といった問題をあつかうことはいうまでもないが、それとともに明治28年度の通常県会に端

を発した「治水費問題」への対処、さらには明治30(1897)年結成の新自由党勢力への対応といった問題にも言及しなければならない。

当時の神奈川県自由党においては、前記の武相支部大会で伊藤内閣との提携問題がとりあげられたように、政府主導の「戦後経営」に対して賛成するか否かが重要課題であったことはいうまでもない。だがそれとともに、日清戦争を機に顕著となった「地域利害」による対立も深刻な事態をむかえ、とりわけ明治28年12月に起こった「治水費問題」は、郡部自由党員に「河川派」と「山岳派」との対立が生ずるなど、極めて難しい政治問題となっていた³⁾。神奈川県自由党で勢力をもつ郡部において、そうした対立が激化することになれば、同県自由党の分裂はまぬがれない状態にあったのである。

これにより、明治29(1896)年の年頭からはじまった一連の調停の動きは、以上のような郡部の分裂を防がんとする動きのあらわれであったが、そうした中で指導的役割をになったのは、同じ武相支部に属しながら中立者たり得た三多摩自由党の有志者であったと考えられる。ちなみに三多摩自由党といえば、明治26(1893)年の三多摩東京府移管を機に、神奈川県自由党とは袂を分かっていたものの、同じ武相支部に属することで、依然として神奈川県政界には隠然たる勢力をもち、また、神奈川県自由党もこれに兄事するところがあったものと見られる⁴⁾。そこで、本稿で日清戦後の神奈川県自由党につい

* 東京情報大学講師

て述べるとなれば、それとともに三多摩自由党の動向にもふれなくてはならない。また、その意味では、この両者の関係をとらえることによって、当時の神奈川県自由党のありかたが浮き彫りになってくるものと思う。

以上の観点から、本稿では、神奈川県自由党の問題を三多摩自由党との関係からとらえることになるが、その中でさらに注目しなければならないのは、明治30（1897）年結成の新自由党に対する神奈川県自由党の対応の問題である。この問題については、既に先学諸氏によって三多摩側から言及されているが⁵⁾、本稿では神奈川県自由党側からのアプローチとして、三多摩自由党の石坂昌孝らが挙げて新党「新自由党に走った事件」に対し、いかに対応したかという視点からとらえてみたい。この事件によって、三多摩地方から多くの脱退者を出した武相支部では、三多摩自由党はもとより、神奈川県自由党の存立すら危ぶまれる事態になったものと思われる。かかる事態に神奈川県自由党は、どのように対応したか。この点についても述べてみたい。

2. 第九議会と神奈川県自由党

明治28（1895）年12月1日に開催された武相支部大会は、神奈川県自由党にとって、日清戦後のありかたを方向づける意味をもっていた。この大会は、別稿で指摘しておいたように⁶⁾、従来「民党」的立場にあった神奈川県自由党が、党本部が推進する伊藤内閣との提携策を支持するか否か、あるいは「戦後経営」の名において「吏党」的立場を選ぶか否かを決定する大会であった。

自由党はこれに先立って、7月17日の代議士総会において、軍備拡張・実業振興・国費増加などを掲げた党の方針をあきらかにするとともに、当時「対外硬派」から強い批判があった遼東還付問題に対しては政府の責任を問わないとし、さらに「今後我党ト其方針ヲ同フシ相共ニ謀ルヘキ者ハ相共ニ内外ノ事ニカヲ致シ、誓テ

愛国ノ至誠ヲ推シ私ヲ去リ公ニ徇ヘ、以テ将来ノ謀ヲ成スヘシ⁷⁾」と、政府の方針に以後同調する用意があることを示していた。

いっぽう、自由党関東派の拠点である「関東自由会」では、そうした党の方針をうけて、8月4日には東京江東中村楼に臨時大会を開催、「関東自由会は今回本部に於て発表したる方針に基き、誓て実行を期する事」等々の議案を可決するとともに、傘下の支部に対して評議員各5名の選出を求め、さらに翌5日に開催された同会の評議員会では、石坂昌孝ら常議員10名を選挙するにいたっている⁸⁾。

武相支部では、こうした動きに対して、9月2日に横浜太田温泉において、代議士・県議ら15名余が「相談会」を催し、「自由党将来の運動方針」を協議した結果、関東自由会に「毎月一回評議員例会を開き以て運動を敏活にし、傍ら増税問題に就きても取調を要したき件を請求する」と決議して、上京委員2名を関東自由会に派遣する等の運動を展開している⁹⁾。

この間、自由党指導部では、政府との交渉の中で軍備拡張・増税（ただし地租は除外する）を認め、そして政府が板垣退助入閣という要求を黙約したことにより、ついに11月22日付をもって以下のような宣言を発表した。

「我党ハ本年七月方針ヲ議定シテ之ヲ世ニ公ニシ、今後我党ト其方針ヲ同フシ相共ニ謀ルヘキ者ハ相共ニ内外ノ事ニカヲ致シ、以テ将来ノ謀ヲ成サンコトヲ宣言シ、即チ朝野ヲ論セス其方針ノ同キ者アレハ相共ニ提携センコトヲ以テセリ。（中略）当路者亦タ深ク時局ノ要ヲ察シ我党ノ誠ヲ諒シ間々民議ヲ容ル、ニ咨ナラサラントシ、其立憲政体ヲ完美ニシ国家ノ基礎ヲ鞏固ニスルノ方針ヲ取り内外ノ事ヲ処スルニ於テ、我党ハ将来ニ其望アルヲ認メタリ。是ニ於テ我党ハ向來当路者ト其針路ヲ同クシテ進ミ之ト相提携シテ、其国家ノ要務ヲ処スルニ協翼シ、以テ我国ノ進運ヲ致サントス¹⁰⁾。」

これにより武相支部では、12月1日には支部大会を挙行し、きたるべき自由党大会に対応し

て、上掲の宣言書に賛成するか否か、あるいは第九議會にあたってどのように取り組むかを問うところとなった。そのもようは、以下のとおりである。

「●自由党武相支部大会及大懇親会 は予期の如く、本月一日午前十一時より鎌倉郡戸塚村鎌倉倶楽部に於て開会せり。来会者は代議士県會議員其他の黨員無慮百有余名にして、幹事小島貞雄氏は例により大会を開く旨を述べ、議事の順序により議長に難波惣平氏を推選し、議事を開く。而して満場異議なく、拍手喝采の裡に左の諸項を決議せし。

一 我党本部の宣言に賛同する事

一 第九議會中は院外運動を盛にする事に幹事改選及代議員の撰定に移りしに、満場一致を以て議長の指名に任ずることに決し、議長は代議員には梶野敬三中村得治の両氏、幹事には村野常右衛門小島貞雄亀井佐一の三氏を指名したりしに、満場拍手同意を表す。(中略)古村喜一郎氏は山田泰造氏外各地よりの祝電を朗読し、右畢て直ちに懇親会を開く。席上、赤尾彦作榎本弁吉両氏の熱心剴切なる演説あり。各胸襟を開きて時事を談論し、午後四時頃散会せり¹¹⁾。」

武相支部大会は、以上のように、党本部の「宣言」に賛成すること、および第九議會に対しては積極的な院外運動を展開することを決議した。

しかし、その後、12月15日に東京芝公園内の自由党本部で開催された党大会では、武相支部の「我党本部の宣言に賛同する事」という決議は大会決議の中に盛り込まれたものの、いまいっぽうの「第九議會中は院外運動を盛にする事」という決議は、党議に反映されずにおわった。12月15日の党大会での決議は、以下のとおりである。

一 本年七月十七日発表の方針を承認する事

一 本年十一月廿二日発表の宣言を承認する事

一 自由権利の伸暢、陸海軍備の拡張、財政の調理、教育の発達、実業の奨励、其他諸般の問題を参酌実行するは、之を代議士会に委任する事¹²⁾

この大会決議によれば、軍備・財政・教育・実業にわたる「戦後経営」の諸問題は、すべて代議士会に委任することになったのである。そうすると、さきに武相支部が提議した「院外運動」の余地はなくなり、これにより第九議會の会期中には、同支部としても党本部・代議士会に全幅の信頼をおいて、議會の推移を見まもるほかに方法はなかった。それだけに第九議會中には、地方黨員が活動する場面はほとんどなかったと見てよい。

かくして第九議會は、明治28年12月25日に召集、同月28日に開会となるが、本格的な審議は、翌明治29(1896)年1月に入っておこなわれる。ここで、以上のような状況から第九議會がどのようにうけとめられていたか、以下、武相支部所属の自由黨員であった田野倉仙蔵(津久井郡選出県會議員)の日記¹³⁾を見てみたい。

一月十日

昨日衆議院ニ於テ改進黨其他ヨリ提出ノ彈劾的上奏案(奉天還附及去年十月十日ノ京城事變失政ニ付テ)百三ニ對する百七十二テ否決ス。

衆議院ニ於テ伊藤首相及ヒ渡辺蔵相の演説あり。

一月十一日

衆議院寥々たり。

二月十六日

昨日工藤行幹外八名の提出朝鮮事變に関する質問、依田道長及工藤行幹竹内正志等の質問演説あり。未ダ終ズノ廿四日まで十日間停会を命ぜらる。

二月二十五日

停会後の衆議院開会。政府員不信任決議案、提出者佐々友房初め国民協會員欠席等ニ依り百六十五ニ對する百一の少数にて否決せらる。

二月二十八日

大竹代議士は現内閣に向って帝国前途に対する所存如何を質問す。大痴けなる哉。

三月三日

衆議院ハ都合により本日より休会。

(『田野倉仙蔵日記』明治29年)

この記述は、おそらく自由党系の『東京新聞』¹⁴⁾を拠り所として書きしるしたものであろうが、それでも地方の自由党員が第九議會をどのようにとらえていたかがわかる。そのとらえ方には、議會のもようを活写し自己の政見を披瀝するといった性格のものではないにしても、いわば地方党員の眼で国政の動向を観察する客観性のようなものが認められるといってもいいように思われる。いずれにしてもここに、第九議會というものが、自由党にとっては政府との提携関係が結実する“場”であり、「戦後経営」の針路が決定する好機会であるとする、一党員の視点があったことはまちがいない。

ところでこれに対して、議會の審議に参加していた代議士たちは、この第九議會をどのようにとらえていたのか。ここで、自由党代議士水島保太郎(神奈川第5区選出)が記した随筆を例示して、そのもようを見てみたい。

「工藤行幹氏、十一日の朝鮮事変を奇貨となし、上奏案敗北の恥辱を雪んとして無遠慮にも国交問題を呶々す。其国家を思はざるの甚しき、素町人に類すと云可き乎。竹内正志氏質問に託し、クリミヤ戦争の軍談を講説する久しうし、遂に朝鮮の事変を機となし国家の憂を慮からず、上奏案敗北の鬱憤を泄らさんとし、国交問題を喋々す。時に

詔勅降下満場厳肅。

借問す。問責派(対外硬派—引用者注)外交は柱に膠して琴を鼓するが如きものにあらず。其四十万卒を坑にせらるゝの勇氣、否な死して悔ひなきの勇氣ありや否や。工藤行幹氏、朝鮮国王を云々す。星亨氏、一打撃を加ふ。行幹氏、新聞紙上の外一も知るものなきを以て、答へ辟易降壇す。甚しひ哉、問責派の無責任や。如斯人国家の

立法部に立つ、憲法政治の美果を結ぶ能はざる所以なり。

明治廿九年二月十五日午後二時三十分詔勅降下す。衆議院内満場総直立、最敬礼を表す。問責派も亦、臣子の礼を知る。豈に教ゆべからざるものならんや。

(中 略)

内閣不信任決議案大敗後の衆議院は、所謂平々凡々の議會なり。是れ確かに三百人士の裏面の講究精密なるを証するに足る。併し新聞屋には御気の毒様と云ふの外謝辞なきなり。而して斯く申す随筆子にも御気の毒様と議會が云ふや否や。

(中 略)

戦後の経営は実に帝国の休戚に関する大問題なり。第九議會平和に円満に之を結了せり。而して秘発かず悔至らず、吾れ我四千万同胞と共に大杯を挙て、帝国の億万斯年を祝さざるを得ざる千載一遇の機運に膺れり。其光榮双肩に燦然たりと謂ふ可き也¹⁵⁾。」

(『第九議會衆議院隨筆』)

第九議會は劈頭から、対外硬派による遼東還付・内閣失政に関する上奏案(1月9日上程)が提出され、またその中頃には国民協会による対韓問題の政府問責決議案(2月15日上程)が提出されて紛糾した。だが、自由党は、それらの上奏案を粉碎し、伊藤内閣が提出した膨大な「戦後経営」予算案をはじめ、その経費補充のための營業税法案・登録税法案等をも通過させていた¹⁶⁾。

前掲『第九議會衆議院隨筆』は、そうした議會のもようを水島保太郎という一代議士の視点からとらえたものであるが、その中でも象徴的というべきは、従来、野党議員であった水島保太郎の立場に、著しい変化があらわれたことである。後日、水島自身も、その点を認めて「私は明治十三年以来、自由党に身を任かしまして以来、逆境の地にのみ立て居りまして多少辛苦を嘗めましたが、第九議會に際し政府と提携のことの始まりまして順境の地に立つようになりまして¹⁷⁾」と述べており、また『第九議會衆議院

随筆』においても「国家主義の極は個人主義となり、個人主義の極は国家主義となるは、哲学の蘊奥を究むるの人を待ずして明かなり。国家主義と個人主義と調合交和して、円満に運転活動せしむるものは真の政事家なり。国民協会と自由党との交渉偶然に非ざるなり¹⁸⁾」と述べ、自党の主義・主張も臨機応変に処して「国家主義」との調合交和もじゅうぶん可能であるとしている。ここにいたって水島保太郎は、与党議員たる地位を得たことにより、それまでの「藩閥政府」に対抗する姿勢を解き、一転して野党を睥睨する立場から、自己の主義・思想を「国家主義」に接近させてとらえるようになったのである。

さて、3月28日に第九議会在閉会となると、神奈川県にあってつぎの問題として自由党の政権参入が論じられるようになった。以下、神奈川県自由党の政論雑誌『新潮』¹⁹⁾に発表された社説を紹介する。

「嗟、第九議会在に於ける戦後の大経営は、吾党の力に依て確立せられたり、而して這般の大経営は、又吾党の手に依て以て実行せられんとす、吾党の第九議会在に於ける功績と今日の責任は大且重しと云ふべし、然れども計画は易く実行は難し、吾党の士奮励一番行政部の実効を挙げ、議会在に於ける言責を完ふするは今日の要務なり²⁰⁾」

神奈川県自由党は、ここに「戦後経営」予算の通過に対する代償として、政府に党員の入閣を求める要求を突きつけた。こうした要求は、かねてからの黙約である板垣退助の入閣を求める動きであり、それが自由党本部に限らず神奈川県から出たことは、板垣の入閣がいかに全党的問題であったかを物語っている。

いっぽう伊藤首相は、こうした動きに対応し、自由党の功績を認めて、4月14日付で板垣退助を内相に任命²¹⁾、加えて三崎亀之助・栗原亮一もそれぞれ内務省県治局長・内相秘書官に任命した(板垣・三崎・栗原は3名とも党籍離脱)。

かくして自由党は、念願の板垣入閣を達成し、伊藤内閣とともに「戦後経営」事業を推進する

ところとなった。神奈川県自由党も、かかる事態を自由党の一大進歩であるとして、これを歓迎した。

「嗚呼吾人の所期は漸く其緒に就き、茲に吾党より出でし新大臣は、責任を以て行政の枢機に参し、吾党が立法部に於て協賛したる諸般の経営を実行するの盛運に会す、自由党の提携する内閣は之よりして益々鞏固なるべし、自由党の地盤は之よりして益々堅固なるべし、而かも又吾国憲政未曾有の政党内閣は、茲に初めて形成せらるゝを見る、我国の前途大に刮目して観るべきものあらん²²⁾」(傍点は引用者、以下同じ)

以上に見るごとく、神奈川県自由党では、板垣の入閣という事態が党勢拡張の好機会となったとし、また「吾国憲政未曾有の政党内閣」が発足したことにより、近い将来には政党政治の理想が実現するものと確信した。

神奈川県自由党では、かねてより、かかる事態を想定して政府との提携を「政党内閣」への足がかりとして位置づけていた。その一例としてあげられるのが、第九議会の開会に際して掲げられた『新潮』の社説である。

「如何にせば責任内閣を建設し得べきかは、吾人の日夜苦慮せし所なり。実に吾人の憂とせし所のものは、藩閥政府の破壊せざるにありしなり、責任内閣の建設せられざるにありしなり。而して責任内閣を建設せんには藩閥政府を破壊するにあり。藩閥政府を破壊せんには、民党連合軍を捲起するにありとは、吾人の宿論なりしと雖ども、三四年來の政治的紛争史は吾人に教ゆるに、各政派を連合するの到底出来難きことを以てしたり、(中略)仮令、民党連合軍を起し得るとするも、時に於て不可なるものあるが故に、吾人は成るべく平和の手段を以て、徐々に藩閥政府を衰微せしむるの時宜に適切なるを信ず。換言すれば、責任内閣を建設するに先立ちて連合内閣を造り、連合内閣を造るに先ちて政府と政党と提携するは、今日に於て最も其當を得たるものなるを信

ず。(中略)故に今日、我党と政府と提携せしものは世変に処して誤らざるものにして、実に政治上の一大進歩と云はざるを得ず²³⁾

ここにおいて、論者は「如何にせば責任内閣を建設し得べきか」と問い、まず「民党連合軍」による政権奪取が難しいという政党側の事情をあげ、さらに日清戦後に政争を拡大せんとするものも時宜に適さないとして「成るべく平和の手段を以て、徐々に藩閥政府を衰微せしむるの」が得策であると論じた。ここでいう「平和の手段」とは、まず第一に政府と提携して「連合内閣」をつくり、それから「責任内閣」(議院内閣制)の樹立をめざすといったものである。

このように見てくると、板垣の入閣によって出現した所謂「伊板内閣」は、一つの「連合内閣」が樹立されたものと見るべきであり、それを『新潮』の論者が「吾国憲政未曾有の政党内閣」と評価したのも、完美なる「責任内閣」への足がかりとして見做していたからにはかならない。

今や帝国憲政の瑞雲は
自由党の頭上に靉々たるを見る²⁴⁾

3. 「治水費問題」と三多摩自由党

明治28(1895)年12月1日の武相支部大会が、日清戦後の神奈川県自由党にとっての新たな出発点となっていたことは、既に述べたとおりだが、その中でおこなわれた支部役員選挙は、またべつの意味で注目すべきものがある。すなわち同選挙において、前年度の幹事であった小島貞雄(都筑郡)・亀井佐一(大住郡)が再選され、また新たに三多摩地区より村野常右衛門(南多摩郡)が選挙されたのが、それである(本稿p.331頁を参照)。武相支部では、明治26(1893)年9月3日の同支部発会式において三多摩から森久保作蔵(南多摩郡)が幹事に選挙された例もあるので、これは日清戦後における神奈川県自由党と三多摩自由党との新たな関係強化を物語っている。

ここであらためて、この両者の関係は従来ど

ういったものであったか、以下、「三多摩壮士」として名を馳せた胎中楠右衛門(のちに政友会代議士)の証言を見てゆきたい。

「ところで一体三多摩壮士と云ふのは、どんな人に依つて組織されて居つたかと云ふと、石坂昌孝といふ人が頭で、それに次いで森久保作蔵、村野常右衛門、まあさう云つた人々が重立つたところで、その他にも多くの人があつたが、その人々の中には三多摩でない、現在の神奈川県の人でも多数あつた。が兎に角当時是が非常な勢ひで風靡して居つたものだ。」

(『胎中楠右衛門氏談話筆記』²⁵⁾)

神奈川県は、かつて高知県とならんで自由党の根拠地として知られた。その中でも石坂昌孝・森久保作蔵・村野常右衛門といった自由民権家を出した三多摩は、県内各地に影響力をもち得ただけでなく、そうした各地からも「三多摩壮士」と呼ばれる青年をあつめていたというのである。神奈川県は、このように石坂・森久保・村野に率いられた「三多摩壮士」をその中核とすることで、全国でも名だたる自由党王国として知られていた。だが、その後、明治26(1893)年に三多摩地区が東京府に移管されたことで、神奈川県自由党の勢力低下は免れない状態となった。

これにより神奈川県自由党では、党勢維持と結束強化のために、同年6月25日には県下有志者をあつめて院外団体「神奈川県青年会」を組織し、さらに9月3日には三多摩自由党と合同で自由党武相支部を設立した。そしてさらに日清戦争がはじまると、三多摩自由党・神奈川県青年会は明治28(1895)年1月に軍夫団「玉組」を結成、比志島混成枝隊の澎湖島占領作戦に従軍するなど勇猛果敢な活動をおこなっている²⁶⁾。

それに対して日清戦争中の神奈川県内の情勢はどうであったかという、明治27(1894)年11月開会の神奈川県会(通常県会)では、郡部・市部議員間に監獄費負担をめぐる議事が紛糾、市部議員が総辞職して、翌年2月の臨時県会でも解決せず原案執行されるという事件が起きて

いた²⁷⁾。そうしてさらに、同年11月に開会された通常県会の郡部会でも、「河川派」(支弁派)議員と「山岳派」(補助派)議員との間に治水堤防費をめぐる対立が起こったのである²⁸⁾。

この対立の中で、「河川派」議員は地方税支弁の立場から原案維持(予算額3,845円41銭9厘)を主張し、いっぽうの「山岳派」議員は町村費補助の立場から修正案(予算額845円41銭9厘)をもって反対していた²⁹⁾。また、これにより両者の主張にかなりのへだたりがあったため、年明けとなっても解決のめどが立たず、結局、2月4日となって県知事による原案執行で一応の決着を見るかたちとなった³⁰⁾。

こうした「河川派」と「山岳派」との対立は、明治14(1881)年に府県土木費に対する国庫補助が廃止されていらい顕著となり、神奈川県会においても、それぞれ「地域利害」を代表する議員の間でしばしば問題となり、激論が交わされてきた経緯がある³¹⁾。それだけに、この問題は自由党武相支部にあっても難問題となり、そのまま未解決の状態が続けば、神奈川県自由党にも深刻な事態が生ずるものと見られた。

以下に紹介する田野倉仙蔵の日記は、かかる事態を憂慮した森久保作蔵・村野常右衛門らの動きを物語っている。

一月一日

今日森^(マツ)窪氏より来信、本県治水支弁ト補助両派の調和ノ件ニ付(去ル卅一日出)

一月十日

森久保、村野ハ前九時頃、杉寄方迄来ル。余、報ヲ得テ直ニ全所ニ行、天野(藤三一引用者注)モ全十時半頃来ル。后三時半頃散会ス。

県治上之件ニ付、森^(マツ)窪、村野、天野等ト杉寄吉兵衛方ニ会ス。

一月二十一日

吉村喜一郎同道、横浜津久井屋ニ至ル。但し、本県有志者新年会兼山派水派調和之為メ。

津久井屋ニテ小島貞雄ニ面ス。同氏ハ議員ヲ辞シタル旨談シテ、直チニ荷物ヲ携帯シ

テ出立、クロ岩ニ向フ。

夜、津久井屋ニテ岡部(芳太郎一同注)、天野、志村(慎一郎一同注)、宮崎(嘉重一同注)其他ト県治上ノ事ヲ談ス。

一月二十二日

午后一時半頃ヨリ神奈川行。

神奈川^(マツ)奈古屋山水調和会ハ少数ノ為メ、自由黨員懇親会トス(会スル者九十余名)。朝、天野氏ハ津久井屋ヲ出立ス。宮崎氏、後ヲ追テ見当ラス。但し、天^(マツ)の氏ハ知事ガ郡部会原案ヲ施行スルト聞、不満ヲ抱ヒテ^(マツ)↑。

(『田野倉日記』明治29年)

ここに森久保・村野両名は、「治水支弁ト補助両派の調和ノ件」で調停役を買って出て、田野倉仙蔵・天野藤三らと相談して「山水調和会」を挙行せんとした。だが、当日は参加者が少なかったため、急遽「自由黨員懇親会」と銘打っておこなわれたという。この会合の名称変更については、単に出席者少数という事由だけでなく、2月1日に県会議員半数改選を控えていたことや、前掲の記事にもうかがえるように「山岳派」の小島貞雄・天野藤三らが議員を辞職したことなども影響していた。おそらく、そこでは両派の和解にはまだ条件が不十分であるといった判断がはたらいっていたものと見られる。

かかる事情の中でおこなわれた「懇親会」のようを、つぎに見てみよう。

「●自由党武相支部新年宴会 一月二十二日神奈川町名古家に、武相の黨員相会して新年宴会を開く。当日午後一時、森久保作蔵氏開会の旨を述るや、拍手万雷の如き間に水島保太郎天野政立外諸氏、数番の席上演説あり。謹んで両陛下万歳を三呼し、次で自由党万歳を三呼し、夫れより盛宴を張り、献酬の間に各胸襟を開いて時事を談論し、十二分の歡を尽して散会したるは、午後七時過る頃なりき³²⁾。」

1月22日の自由黨員懇親会は、その冒頭で森久保作蔵が開会の辞を述べるや、拍手万雷のごときありさまであったという。森久保にとって

は、これが軍夫「玉組」取締役として従軍して以来の第一声であり、その勇猛果敢の行動を称賛して、会場の氣勢も大いに盛り上がったものと見られる。この懇親会の出席者は96名であったが、その中には森久保・村野はもちろん、井上隆治・土方房五郎・内藤武兵衛・大塚教四郎・篠野勝太郎といった「三多摩壮士」の名前も見られる³³⁾。おそらく彼らも神奈川県自由党の内部対立を憂慮し、この懇親会に馳せ参じたものであろう。

かくして「山水調和会」は「懇親会」となり、治水堤防費をめぐる問題も以後に持ち越すかたちとなったが、それでも2月1日に県会員半数改選がおこなわれ³⁴⁾、まもなく臨時議会が始まるとなると、武相支部としても改めて自党の調和と結束をはかる必要にせまられた。つぎに示す3月1日の武相支部懇親会は、まさにそうした時期に催されたものである。

「●自由党武相支部懇親会 予期の如く本月一日正午より、神奈川町名古屋に於て開かれたり。森久保作蔵氏、開会の辞及中央の政況を報道し、代議士徳増源太郎氏は第九議会に対する方針書を朗読せられ、大井鉄丸氏は昨年末県会に於て河川山岳両派の小軋轢ありしも、霽然融合したるは偏に先輩諸氏の尽力と公明正大なる党員諸君愛党愛国の然らしむるものなりとの意を以て深く謝辞を述べられ、且三浦郡県会議員半数改選々挙の模様を報道せられたり。酒間、沼田（林蔵一引用者注）氏の壮快なる剣舞あり。各胸襟を開きて時事を談論し散会せしは、午後五時半頃なりき³⁵⁾。」

この懇親会の趣旨は、以上の記事ではかならずしも明確ではないが、『田野倉日記』の3月1日条に「本日神奈川町名家楼に県治上（即ち水陸両派）之懇親あるの通知に接す」とあることから、この懇親会は「山水調和会」のねらいをもって開催され、河川派および山岳派が「霽然融和」することに重点がおかれたと見てよい。

ここにおいて、治水堤防費をめぐる郡部議員間の対立は、曲がりなりにも一つの進展を見る

にいたったことになる。また同時に、そのことによって3月16日開会の臨時県会にも対応できる見込みが立ったといえるだろう。以下に示す動きも、そうした流れの中からおこなわれたものである。

三月十五日

岡部、宮寄来ル。森⁽⁷⁷⁾ 来ル。難波惣平氏来ル。

議員外有志ハ青年会（神奈川県青年会一引用者注）事務所ニ於テ議長副及常置委員ノ交渉会ヲ開ク。

（『田野倉日記』明治29年）

神奈川県自由党では、以上に見るごとく、3月15日に神奈川県青年会事務所において「議員外有志」を集め、翌日にはじまる臨時県会への対策を協議した³⁶⁾。その場合、まず問題となるのは正副議長の選挙であるとしても、この問題に院外者が関与していたのであるから奇異な印象をあたえないではない。けれども、そうした会合の場に郡部の重鎮たる難波惣平や岡部芳太郎（いずれも前県議）、さらに三多摩からの森久保作蔵があったとなれば、臨時県会に対する院外者の影響力はじゅうぶんあったはずである。

かくして3月16日の臨時県会では、郡部から森録三郎（自由党）が議長に、また市部からは鈴木稲之輔（自由党）が副議長に選出された³⁷⁾。このことは、県議会における自由党の改進黨に対する優勢、そして同じ自由党でも郡部議員の市部議員に対する優位を示すものである。そのことは、とりもなおさず郡部議員における「河川派」と「山岳派」との力が結集した結果であるとしてよい。

ここに、「河川」・「山岳」の対立は鎮静化した。この間にあって、森久保や村野といった有志者の尽力があったことはいうまでもない。これにより三多摩自由党は日清戦後においても、神奈川県自由党に影響力をもち、県下の自由党員に対しても指導性をもち得たといってもいいだろう。

そこで、以上のような関係を象徴的に物語る事件として、同年8月16日に举行された新任群

馬県知事石坂昌孝への送別会のもようを見てみたい。

「●神奈川に於る石坂群馬県知事の送別会

自由党武相支部の発起に係る新任群馬県知事石坂昌孝氏の送別会は、予期の如く一昨十八日（十六日の誤り一引用者注）午後一時より神奈川町名古屋楼に於て開会せり。当日の来会者は同市^(マツ)の黨員及び群馬県人等百有余名にして、石坂氏は森久保作造^(マツ)氏等と共に、午後二時三十分新橋発の汽車にて神奈川に下車せしが、有志者は停車場迄出迎ひ、石坂君万歳の声と共に嘯嘯たる奏樂あり。頓て会場に着するや配膳となりて、開会を告げ、代議士水島保太郎氏起て、石坂氏の答辞あり。次に代議士徳増源太郎氏祝詞を朗読し、次に梶野敬三氏実業者を代表し、氏の新任を祝する演説あり。夫れより来賓献酬の間に時事を談論し、各^(マツ)観を尽して散会せしは、午後6時半頃なりし。」

（『東京新聞』M29.8.18）

この送別会は武相支部がよびかけ、『田野倉日記』の8月16日条によると「石坂昌孝任群馬県知事ノ送別会ヲ本県有志ニテ神奈川町名古屋ニ開ク」というものであった。ここに、石坂の群馬県知事就任が神奈川県下の自由黨員たちに歓迎されたのは、石坂自身が三多摩自由党の頭領であると同時に、武相支部の最高実力者であったからにほかならない。したがって神奈川県自由党としても、かかる関係から盛大なる送別の宴を設けるところとなったのである。

かくして石坂昌孝は県下の自由黨員に見送られて、任地である群馬県に向かうこととなる。ちなみに、石坂が群馬県知事に拔擢されたのは、時の内相・板垣退助の力があずかっていたことももちろんであるが、このように一自由黨員が地方長官になったのは、まさしく自由党が政府と提携したことにより得た特典であるとともに、自由党が政府党として歩み出した一つの証であった。

しかし、それから12日後の8月28日、伊藤首相は所謂「大隈入閣問題」による閣内不統一を

もって辞表を提出し、それによって板垣内相をはじめ各閣僚も辞職するところとなった。ここにいたって、石坂も県知事を辞職するか否かの選択をせまられたが、敢えて知事の任に留まると決し、9月28日には代議士の地位を放棄した³⁸⁾。

ここに石坂が代議士を辞したことで、三多摩地区（府下第13区）では代議士補欠選挙がおこなわれる。そうした中で最大の焦点になったのは、最高実力者・石坂の後継者が誰になるかという点であった。武相支部では、そうした事態に即して、多士済々の三多摩でも一頭擡んでいた森久保作蔵（府会議員）を適任者と認め、自由党候補者として正式に推薦した。この間の事情について、渡辺欽城『三多摩政戦史料』は、「党中幾多の人物は有つたが、其輕重を問はば皆同じで一を前にして一を後にするの別に困惑する事状が纏紛して居た、其処で戦地より帰つた森久保の労をねぎらひ一は従来の苦戦奮闘の功を称する事とし、一時彼を挙げて他の不平や軋轢を防ぐは最も得策であらうと云ふ議が起り、之を公議に懸けて見ると否定する者は少く却つて双手を挙げて賛同する者もあった³⁹⁾」と伝えている。

このような動きに対して、同じ自由党に所属し実業家として知られた青木正太郎も立候補を表明し、それに同党元代議士瀬戸岡為一郎の一派、革新党砂川源五右衛門の一派や国民協会の一部も加わって、反森久保の陣営を形成した。そこで武相支部では、それまで青木に立候補辞退を勧告してきた経緯もあるだけに、立候補に踏み切った青木らを除名処分にした。以下、長文にわたるが、武相支部による除名までのもようを紹介する。

「●自由党武相支部常議員附青木一派除名
元来武相支部は自由党中の鎮台にして、就中三多摩郡は其中堅なり。三多摩郡にして自由党の大勢に反抗す、所謂螳螂の斧にあらずんば、提灯と釣鐘ならんのみ。（中略）曩に石^(マツ)坂氏の衆議院議員を辞するや、自由党中獅子心中の虫なる瀬戸岡為一郎氏一

派は、革新党なる砂川源五右衛門一派及国民協会の一部に交渉し、敢て三多摩自由党の大勢に拮抗し反旗を翻し、只管私利を営まんことを謀り、窃に青木正太郎氏を推て候補者に擬し、其運動に着手せり。是に於て武相支部党員の重立たるもの、或は友誼上より或は党勢拡張の上より、青木氏に向て懇諭する所あり。青木氏も候補者たることは、断然辞退する旨公言せり。然るに三多摩予撰会及武相支部常議員会にて森久保作蔵氏を候補に推撰するや、青木氏は俄に前言を翻して公然打て出で、遂に鎬を削りて相争ふに至れり。即、青木一派が身自由党員なるを顧ず、三多摩の輿論及武相支部の決議に従ふを肯せず、剩へ革新党及国民協会一部に結び、其力によりて当撰を万に僥倖せんとしたるは、尤不都合の行為なりとなし、本月五日の武相支部常議員会に於て、青木瀬戸岡外七名を除名したりと云ふ⁴⁰⁾。」

これに先立つ10月3日、神奈川県郡部の自由党有志者は神奈川県青年会事務所にて、河川派と山岳派との交渉会を催し、その場で青木一派の処分についても協議している。

十月三日

午後青年会に於て山水兩派^(ママ)行渉ナル。出席、中郡、水島保、福井、亀井、大貫、足柄、長谷川豊、星野、愛甲郡、中村、橘川、難波惣平、霜島、高座、長谷川、牧野、大島正義、津久井、梶野、自分(田野倉一引用者注)、鎌倉、徳増、露木二氏、三浦ナシ、久良岐、永島、都築、小島、橘樹ナシ、其他ニテ、治水支弁ニ対スルニ、道路も支弁にスルヲ決ス。

青木其他南西多摩自由党員十二名除名除名の叢談ヲナス。

(『田野倉日記』明治29年)

この記事に見られる主な出席者は、表1に示したごとくであるが、それらは各郡各地の「地域利害」を代表する有力者であり、実質的には郡部の治水堤防費をめぐる対立した「山水兩

派」の交渉委員たちであった。この交渉会には、折からの補欠選挙で森久保作蔵や村野常右衛門は出席しなかったため、郡部の自由党員たちが問題を解決しようと努め、その結果、前掲の日記中にも見えるように、治水堤防費の地方税支弁と同様に道路橋梁費についても地方税支弁とする取り決めがなされた⁴¹⁾。これにより遂に約10カ月間にわたる河川派・山岳派の紛議は、終焉をむかえたのである。ここに両派の交渉が成功したことは、いわば「三多摩ぬき」の状態でも、郡部自由党員たちの妥協があれば、「地域利害」を守らんとする協調が可能であることを証明している。また、そうすることにより、郡部自由党としての結束も可能であることを示唆している。

さて10月3日の交渉会では、さらに青木正太郎の立候補で揺れる三多摩補欠選挙の問題がとりあげられ、その問題に自由党分裂の危機があると認めた郡部有力者は、青木派12名を除名する方針を打ち出した。これによって武相支部では、前掲引用文にもあるとおり、10月5日に常議員会を開いて青木派9名を除名処分にすると決定し、自由党本部もその請求をうけ入れ、10月8日にはそれを承認している⁴²⁾。以上によると、除名された青木派の人数に若干の相違はあるが、そこでもおおむね郡部自由党員の意向がいかされたことと見るべきだろう。

ところで、以上のように曲折を経ておこなわれた補欠選挙は、10月16日の開票結果では、森久保作蔵952票に対して、青木正太郎394票となつて、森久保が圧勝をおさめた⁴³⁾。ここにおいて三多摩地区は、ひとまず落ち着くところとなった。

4. 新自由党への対応

自由党は、明治29(1896)年8月末以降、第二次伊藤内閣の総辞職により、一転して逆境期をむかえた。しかしながら神奈川県自由党においては、前述した「山水兩派」の対立がおさまったことで、その年の後半期は比較的平穩であ

表1 「治水費問題」と郡部指導層

郡	氏 名 経 過	M29.1.22 支部新年宴会 (交渉不成立)	M29.3.1 支部懇親会 (和 解)	M29.10.3 山水両派交渉会 (交渉成立)
久良岐 郡筑	永島亀代司 (県議)	○	○	○
	小島 貞雄 (前県議)			○
鎌倉	徳増源太郎 (代議士)	○	○	○
	露木 昌平 (県議)	○	○	○
	露木要之助 (元県議)	○		○
高座	長谷川彦八 (元県議長)		○	○
	大島 正義 (前県議)	○	○	○
	牧野 随吉 (県議)			○
中	水島保太郎 (代議士)	○	○	○
	亀井 佐一 (支部幹事)	○	○	○
	福井 直吉 (前代議士)		○	○
	大貫 弥七 (県議)	○	○	○
愛甲	橋川文次郎 (県議)	○	○	○
	中村 得治 (県議)	○	○	○
	難波 惣平 (前県議)			○
	霜島幸次郎?			○
足柄	星野利兵衛 (県議)	○	○	○
	長谷川豊吉 (前県議)	○	○	○
津久井	梶野 敬三 (元県議)	○	○	○
	田野倉仙蔵 (県議)	○		○

注1) 本表は M29.10.3山水両派交渉会の出席者のみを対象とし、氏名欄の()には明治29年10月時の地位を表示した。

2) ○印はそれぞれの出席を示す。

3) 『新潮』第19号・第20号、『田野倉日記』(明治29年)、神奈川県議会編『神奈川県議会の百年』(同議会・1979)により作成。

ったといえる。

だが、第十議会が12月25日にはじまると、自由党では衆議院議長の選出をめぐる内部分裂が生じ、翌30(1897)年1月には、関東派代議士他7名が自由党を脱党する事件が起こった⁴⁴⁾。その脱党代議士の中には、三多摩選出の中村克昌がおり、のちには同じ三多摩の森久保作蔵や神奈川県第5区選出の水島保太郎もそれに加わった。

この事件は、そもそも自由党を分断せんとした松方内閣の策謀から出たものとされ、自由党系の『東京新聞』(M31.3.10)によると、樺山資紀内相が前年12月下旬に自由党の武者伝二郎・西村甚右衛門両代議士と接触し、武者・西村の「自由党を分裂せしむるには先づ三多摩郡を手に入るゝを要す」との進言によって、まず三多摩の総帥たる石坂昌孝(群馬県知事)には「永久知事たらしむ事」と「運動費贈与を約束する事」との条件を示し、さらにその股肱たる中村・森久保・村野には「代議士は知事に採用すべく、其他は相当の官職を授くべき内約」を与えたとされる。

ことの真偽はともかくとして、ここに石坂をはじめ三多摩自由党の重立った者が脱党したとなると、武相支部としても、その進退を決定せざるを得ない事態となった。以下、1月24日におこなわれた武相支部臨時大会の模様を紹介する。

「●武相支部大会の決議

一月二十四日午後三時より、横浜市同支部楼上に於て大会を開く。来会者は同部員重立ちたる人々一百余名にして、幹事亀井佐一氏開会の主旨を述べたり。其の大意は

今回三多摩郡の我党員挙て脱党さるゝ事に決したる趣きに聞及びたり。就ては此際、我々神奈川県党員は如何に進退すべきやの点に付、御協議なさるゝがために、此会を開きたる次第なり云々。

是に於て、会員中より中央の政況に付き一二の質問あり。山田(泰造)、徳増、山田(嘉毅)三代議士の之に対する答辞ありて、後

に満場一致を以て

神奈川県下の自由党員は依然自由党員たるべきは勿論、此際一層奮励して党勢拡張に尽力すべき事

を決し、且つ自由党武相支部幹事より関東会幹事に対して、党勢拡張に関する協議の爲め、関東大会の開会を請求する事に決定し、其翌日左の諸氏、右の決議を携帯して本部に報告するところあり。猶ほ板垣総理とも数刻の談話を爲し、夜に入りて退出したり。

森 録三郎 宮田^(マ)憲治 鈴木^(マ)稲之助
大貫 弥七 亀井 佐一 中村得治^(マ)

1月24日の武相支部大会では、以上のとおり、満場一致をもって、党員全員が留党し「党勢拡張」に努めること、および関東自由会に対して臨時大会の開催を請求することが決議された。これにより翌25日には森・宮田・鈴木・大貫・亀井・中村の6委員が党本部を訪れ、決議書を提出するまでとなった。

いっぽう、これに呼応して神奈川県第5区でも、脱党が予想される水島保太郎代議士に対して留党を勧告する運動が起こった。

「神奈川県大住郡石田松之助、岡綏郡近藤市太郎、同足柄上郡大島敬蔵、同足柄下郡岡田寅吉の四名は各郡の惣代として昨日自由党本部に出頭したるが、其説く処に拠れば右四郡は再昨二十八日に同盟会なるものを開き、有志人民一同依然自由党に在りて力を尽すべきことを決議し、兼て又代議士水島氏に向て留党の勧告を為さんがために、特に上京したるなりとぞ。」

(『東京新聞』M30.1.30)

神奈川県第5区では、水島代議士に脱党の挙動ありと見るや、1月28日には「四郡同盟会」なるものが組織され、さきの武相支部と同様に有志者一同が留党して尽力すべきこと、また水島代議士に対しても留党を勧告することを決議するところとなった。そして翌29日には、石田・近藤・大島・岡田(いずれも県議)の4名が各郡惣代として自由党本部に出頭し、水島代議士

に対して留党を勧告した。

このように神奈川県自由党の中には、いわば選挙区レベルにおいても、その「地盤」をまもるとともに、党本部などに積極的にはたらかける動きが出てきたのである。

関東自由会では、こうした動きに対応して、1月26日より党本部で「党勢拡張」に関する協議をかさねた結果、2月14日午後1時から神田錦輝館において臨時大会を開催することを決定した⁴⁶⁾。

かくして2月14日に開催された関東自由会臨時大会では、集まった党員が「定期前已に楼上に充溢して、無慮五百名に上り流石の大広間も為に隘く感ずる⁴⁷⁾」ほどであり、定刻より始まった会議では、同会幹事後藤亮之助が、つぎのような宣言を読み上げた。

「今や第十議会の酣なるに際し、吾関東自由会は頗る政海の近状に慷慨し、併て関東の形勢に憂憤する所あり、茲に臨時大会を開き、大に立憲の精神を明かにして天下に宣言する所あらんとす。(中略)夫れ我党前半の歴史は、死生の途に談笑して以て専制を翻へし去つて今日の憲政を拓き成せり。今日の事、至誠骨髓を填め、先づ地方の団結を鞏固にして社会の制裁を振はし、不義の徒の脚を容るゝの余地なきに至らしむれば、其の効を収むる寧ろ一挙手にして足らざらんや。吾関東自由会は敢て野を掃て以て先驅の労を辞せざらんとする者なり。乃ち天下の同志に宣言すること爾り⁴⁸⁾。」

ここに関東自由会は、石坂昌孝ら三多摩自由党員の大量脱党、あるいは各県に脱党代議士が続出した事態を厳しくうけとめて、なにより「先づ地方の団結を鞏固にして社会の制裁を振はし、不義の徒の脚を容るゝの余地なきに至らしむ」ることが肝要であると訴えたのである。

臨時大会は、このあと各県代表者の政況報告があり、さらに協議会に移って

一我関東は、此際各府県下に同志者の大会を開き、大に団結の鞏固を謀ること、
一党勢の拡張を計るか為め、各府県下に適

宜の委員を設け、諸般の計画を為すこと、
一当第十議會開會中、院外運動として各府県より各二名以上の委員を滞京せしむること、

一中央の政況に応じ、又は関東相互の応援に派出せしむる為め、各府県は拾名以上の青年有為者を撰定し置くこと⁴⁹⁾、

等々の決議がなされた。そしてこの後、板垣退助らの演説で締めくくり、会員一同の万歳三唱により終会となった⁵⁰⁾。

関東自由会臨時大会は、以上のように無事終了し、これにより各府県の支部では、上掲の関東自由会決議にもとづいて、「団結の鞏固」と「党勢の拡張」をはかるため、「同志者の大会」の準備にとりかかるところとなった。

神奈川県自由党では、これによって「同志者の大会」開催に向けて準備を開始するところとなったが、それとほぼ時期を同じくして三多摩の石坂一派も新党「新自由党」の結成(2月28日に東京芝紅葉館にて結党式⁵¹⁾)を準備していたので、そうした動きに備えて支部役員・有志者を各郡に派遣し、県内から脱党者が出ないように努めた。ここで当時、県内各地をまわった田野倉仙蔵の遊説の模様をうかがってみたい。

(2月)

全十七日 石井鎌之助ト共ニ三浦郡漫遊ノ余ニ上ル。(以下略)

十八日 北風天気人車ヲ雇ヒ、三人而葉山ニ至リ、角田銀蔵氏ヲ訪フ。同氏在宅。政況違事ナキヲ聞き、尚ヲ自党拡張に尽力あらんヲ約して別レ、(中略)同夜、鈴木林蔵氏来ル。

全十九日 朝、鈴木林蔵氏来リ、又大井林蔵氏来リ、鈴木安蔵氏来ル。時事談シ鈴木、大林の二氏に袂別す。(中略)久里浦村北村茂憲ヲ訪フ。同氏在宅。来ル二月一日半改改選ノ徴兵参事員及目今政事界ノ濁流奔逸ノヲを談示、自党拡張の急務ニ及賛成を約て、同家を辞す。(以下略)
二月廿日 午前十時頃、同所出立。腕車ヲ雇ヒ、横須賀町(大忠)鈴木忠兵衛氏を

訪フ。同氏在宅。同家に於テ風戸其他ノ有志ヲ召集セラル（大井鉄丸氏、政変を氣遣ヒ自由党本部に問合せノ為、出京中、不在）。(以下略)

二十一日 三人同道津久井屋ニ至ル。(以下略)

二十二日 桐ヶ谷氏と別レ、午後五時半頃より亀井佐一氏と共に足柄漫遊の途に上り同八時国府津着、瑞勝園に泊す。

二十三日 小雨。朝より腕車に乗シ二人同道。長谷川豊吉氏を訪問。同氏在宅。同氏曰ク、余ハ新自由党に抜駈等決シテ不致と。(以下略)

二十四日 朝、花輪来リ、星野来ル。四人同道、今井徳左衛門氏ヲ訪ヒ、夫より今井広助氏ヲ東海新聞社に訪、道を転シテ人車鉄道ニ乗り、真鶴村岡田寅吉氏ヲ訪フ。同氏病臥中故、病床ニ就、時事を談ず。后四時半頃より湯河原村に臨ム。七時半頃着。藤田屋に一泊す。

二十五日 人車にて帰路ニ就ク。小田原にて昼飯を喫す。此処にて小沢勝蔵、小沢衡平氏及小田原町長其他ニ面ス。同所にて星野氏と別シ、亀井氏と同道。帰路、大磯町宮代屋ニ泊ス。天野政立氏に便を出す。同氏来リ、喋々数千言政党歴史を談て帰ル。

二十六日 亀井同道、大磯出立。金港ニ帰ル。(以下略)

(『田野倉日記』明治30年)

ここに紹介した記事は長文にわたるが、2月17日から20日までの三浦郡の遊説のもようや、同月22日から25日までの足柄両郡・絢綾郡の遊説のもようがうかがえる。まず三浦郡の状況について見ると、「目今政事界ノ濁流奔逸ノ」を談示(2月19日)あるいは「政変を氣遣ヒ自由党本部に問合せノ為、出京中」(同月20日)などあるように、同郡では脱党問題に対する把握がまだ不十分であったようである。これに対して、田野倉らは党本部や関東自由会等の動向を説き、さらに「政況違事ナキヲ聞キ、尚ヲ自党拡張に

尽力あらんヲ約して」(同月18日)とあるように、三浦郡の政情を掌握するとともに、「党勢の拡張」をはかるよう要請していたと考えられる。

つぎに足柄両郡・絢綾郡の状況について見ると、この地域は水島代議士の選出地でもあるので、2月28日の新自由党結党式に際して脱党者が出ないよう、所謂「地盤」固めをしておかねばならなかったといえる。そこで、支部幹事の亀井佐一も田野倉とともに、精力的に各地を遊説した。その場合の訪問先は、長谷川豊吉(前県議)・星野利兵衛(県議)・今井徳左衛門(県議)・岡田寅吉(県議)・小沢衡平(前県議)・天野政立(大磯町助役)らであったので、おそらくそうした有力者を掌握することに遊説のねらいがおかれたと考えられる。そうした意図は、「余ハ新自由党に抜駈等決シテ不致」(2月23日)といった長谷川豊吉の言葉からあきらかである。

神奈川県自由党では、以上のような遊説を展開したことで、県内での脱党者続出という事態をひとまず阻止したわけであるが、それからまもなく、新たに結成された新自由党勢力にどのように対処すればよいかという、つぎの課題にとりくまなければならなかった。つぎに紹介する3月14日の武相支部懇親会は、まさにそうした課題にとりくむための大会であった。

「●武相支部大懇親会

本月十四日午後二時神奈川県鎌倉郡戸塚町鎌倉倶楽部に於て大懇親会を開きたり、来賓には中島信行、片岡健吉、山田東次、中野寅次郎の諸氏にして、会するもの二百有余名、席定まるや支部幹事亀井佐一氏は簡単に其主意を述て曰く、今日の政界は百鬼夜行の有様にして官職黄金により我党中節を売り操を变ずるの幾多代議士を出すに至る、殊に我武相支部黨員が其導火線たりしに至ては悲憤慷慨の至りなり、且つ彼等は厚顔にも種々の離間中傷輩語百出権謀術数を以て吾党を毀傷し、吾支部黨員を分離せしめんとす、此際吾人同志は益々親睦を厚し相信し相許し、彼等腐敗漢をして我支部に足を容るゝの余地なからしめんとすを希

望す、即十数年来吾々が希望せし善美なる憲政を見るまで奮て尽力あらんことを望む云々、次に幹事一名の補欠選挙、上京委員二名を撰挙する為め、齊藤万三氏を坐長に推し即坐長の指名により、幹事には鈴本稻之輔氏、上京委員には中村得治、長谷川彦八両氏を指名したり、次に代議士徳増源太郎氏、次に中野寅次郎氏、次に中島信行氏、次に片岡健吉氏の席上演説あり、何れも拍手大喝采なり、終て幹事は、山田代議士以下の祝詞祝電を朗読す、次に柏瀬権次郎、金子角之助氏の質問即目下武相支部の政況如何の問に對し、幹事亀井氏は答て曰く我支部中神奈川県に属する分は脱党者頗る少数にして水島保太郎の外僅か四名に過ぎず、且各郡、黨員中目下の政変に感憤して、続々加盟証を請求し来るあり、即神奈川県は党勢一層振興の模様あり、且多摩郡の最初悉く脱党するやう聞及びたれども、其後形勢一変し北多摩郡の如き現に府會議員比留間邦之助、同清十郎、西野寛三氏外有数の有力家依然我党に留まり、党勢拡張に尽力せられつゝあり、西多摩郡正義の士あり南多摩郡にありても林副重氏の如き尽せらるゝありと⁵²⁾。

武相支部幹事の亀井佐一は、この大懇親会の冒頭に於て、支部黨員が脱党事件の発端となった事実を指摘して「我武相支部黨員が其導火線たりしは悲愼慷慨の至り」であると言ひ、またさらに「彼等は厚顔にも種々の離間中傷蜚語百出権謀術数を以て吾党を毀傷し、吾支部黨員を分離せしめんとす」る状況があるとしている。おそらく脱党者による支部黨員への切り崩しは、それまでにかなりおこなわれていたのであろう。そこで亀井は、かかる事態に對して「此際吾人同志は益々親睦を厚し相信じ相許し、彼等腐敗漢をして我支部に足を容るゝの余地なからしめんことを希望す」と力説した。この亀井の開会の辞は、さきの関東自由会臨時大会の宣言にある「先づ地方の団結を鞏固にして社会の制裁を振はし、不義の徒の脚を容るゝの余地な

きに至らしむ」の文言を援用したものである。そのことから、この大親睦会が関東自由会の決議をうけて開催されたことがわかるのである。

また、この大懇親会で、異例ともいふべき役員補欠選挙がおこなわれたが、これはおそらく三多摩自由党の村野常右衛門が脱党したことによるものであろう。その結果、新たに横浜市部から鈴本稻之輔（県会副議長）が幹事に選ばれた。これにより武相支部では、明治27（1894）年11月以来、監獄費負担をめぐる対立していた郡部と市部のあいだに妥協が生まれ、未曾有の難局にあたらんとする陣容ができたといえるだろう。しかしながら、そうした両者の関係は、上京委員の選挙において郡部から中村得治（県議）・長谷川彦八（元県会議長）が選出されたように、あくまで郡部の優位を前提にしてのことであつた。

ともあれ、ここに郡部と市部による支部指導体制が成立したのは、何より武相支部の方針として神奈川県自由党の結束と「地盤」確保に努めようとした結果であり、またその努力によって県内全域から新自由党勢力を排除せんとしたためでもあつた。

これに對して三多摩の形勢は、あきらかに不利であつた。当時、三多摩に於ては、北多摩の比留間邦之助・同清十郎・西野芳寛（いずれも府會議員）や南多摩の林副重（元県議）らが自由党にとどまつたものの、石坂・森久保・村野といった指導層が一斉に脱党した痛手は大きく、一時は三多摩自由党の存続すら危ぶまれた。ちなみに、2月28日におこなわれた新自由党の結党式に動員された「三多摩壯士」は、南多摩郡569人、北多摩389人、西多摩281人、総計1,239人であつたといわれるだけに⁵³⁾、これにより三多摩自由党は、その勢力・組織力をそっくりそのまま新自由党に持つてゆかれたと見てよい。そうすると武相支部としても、ほとんど手の施しようもなく、当面は事態を見守る以外に方法はなかつたものと思われる。

かくして武相支部大懇親会では、自党の結束と「地盤」確保に努め、新自由党勢力を排除せ

んとする運動がうまれたのであるが、これとほぼ期を同じくして神奈川第5区では脱党代議士に辞職を勧告する決議がおこなわれていた。

「●水島代議士に対する選挙区の決議
神奈川県第5区撰挙人を以て組織せる四郡同盟会は、代議士水島保太郎氏が自由党を脱せんとするの挙動あるや、総代を派して留党を勧告せしにも拘はらず、毫も撰挙区民の意向を顧みず脱党せしを以て大に憤慨し、一日も早く変節代議士を排斥し、撰挙区民の潔白にして依然自由党の柱梁を以て任ずる所以を天下に発表せんが為め、去る十三日大磯代楼に於て同会を開きしに、時事に憤慨せる折柄とて各郡より来り会するもの続々として踵を接し、流石の宮代楼も立錫の地なきに及ぬ、定刻に至るや幹事近藤市太郎氏開会を報じ、直に会議に移り満場一致を以て左の件々を議決し、続て懇親会を開き、同区の名士伊達時、栗原宣太郎、福井準造諸氏の痛快なる演説あり、盃盤の間互に時事を談じ、前途の運動を約して散会せり

決 議

- 第一 水島代議士に向て辞職を勧告すること
- 第二 勧告委員五名を本会員中より選抜すること
- 第三 其勧告に応ぜざる時は信任欠乏の旨を新聞紙上に広告すること
- 第四 其広告文は委員に一任すること
但し四郡同盟会の名を以てす⁵⁴⁾。」

3月13日の四郡同盟会では、脱党した水島代議士への措置として、委員4名を派遣して辞職を勧告し、もしも勧告に応じない場合には新聞紙上に「信任欠乏の旨」を広告すると決議した。これにより事実上、水島代議士は選挙区での信任を失ったことになったが、それでも水島自身に辞職の意思がなく、代議士として居すわったので、四郡同盟会は、ついに新聞紙上につぎのような広告文を発表した。

「神奈川県第五区撰出代議士水島保太郎氏

が、何の名分もなく自由党を脱し、新自由党に加盟したるは、不徳義無節操の行為と認む。

故に本会は信任欠乏を表白す。

神奈川県四郡同盟会」

(『東京新聞』M30.3.18)

これにより神奈川県第五区においては、3月下旬までには一応の決着がついたようである。

ところで、これに対してそれ以外の地域ではどうであったのか。ここでは、三多摩とは従来縁の深い愛甲郡・中郡(旧大住・綾瀬郡)を例としてあげ、三多摩からの新自由党勢力浸透に際して、どのように対応したかを見てゆきたい。

「●新自由党県下を浸蝕せんとす 新自由党员石坂昌孝氏は内藤霜島の両氏を随へ墓参鮎鯨を名として愛甲郡へ出馬し、同地辰己屋に宿泊し小鮎村愛川村其他二三の村落に遊説を試み、一方に同党有志より自由党员に向て石坂氏来遊に付面会したき旨申送りたるよしなるが、同郡有志は何れも激昂の余り面談を謝絶せり、偶々一二止むを得ず面会せしものありしが、唯一片の挨拶のみにて匆々辞し去りたりと云ふ。氏今昔の感果して如何。氏は又山田猪三郎氏を随へ中郡に赴きたるよしなれど、好成绩ありしか聞かまほし⁵⁵⁾。」

この記事は、明治30(1897)年8月頃のことであるから、当時の石坂昌孝はただの新自由党员であつたにすぎない。一時は群馬県知事として栄誉栄華をきわめた石坂ではあつたが、その年の4月7日付で解任されていたのである⁵⁶⁾。

既に新自由党は、第十議會に際しては薩派と提携し、与党の進歩党・議員倶楽部とともに、松方内閣による所謂「第2期軍拡計画」予算を小削減で通過させてはいたが、議會閉会(3月24日)後の官吏大更迭に際しては、何ら恩典にあずかることなく⁵⁷⁾、石坂までが前述のような解任の憂き日にあつていたのである。結局、新自由党は代議士12名の小政党にすぎなかったもので、ここでは大政進出の余波をうけたのだともいえるだろう。

さて、そうした中で石坂の遊説がおこなわれたのであるから、神奈川県自由党では、それを新自由党の党勢拡張として警戒せざるを得なかった。それに対して、石坂の目的は、おそらく愛甲・中両郡の旧知を訪ねて新自由党に勧誘し、併せて党勢拡張に努めるところにあったと思われるが、いずれにしても両郡の自由党員たちの態度には厳しいものがあつた。かつては神奈川県自由党の最高実力者として君臨した石坂も、ここにいたっては「墮ちた偶像」として迎えられたにすぎなかった。

新自由党は、その後、薩派の高島鞆之助陸相(兼拓相)の与党工作から長谷場純孝一派・国民倶楽部と合同して「公同会」を組織し、さらに自由党の一部と通じて「内閣改造」をはかった⁵⁸⁾。つぎに紹介する記事は、まさにそうした時期のものである。

「●浮説と実説

薩派の新自由党外二派は合同して公同会となり、之に自由党の一部を誘致するとて、彼等勝手に其の勧請帳に神奈川県自由党諸氏の名をも書き聯ね居る由伝ふる者あるが、今日同県自由党員の石坂変節の輩を排撃するの気焰は復た尋常一様に非ず、殆ど之れを蛇蝎の如く惡み居れば、同県自由党員として何ぞ其の詆唾し措かざる処の石坂の跡を踐む者あらんや、畢意彼等の濫りに合、諸氏の名を窃用し居るは例の運動費を取り出す奸手段に外ならざるべしと、同県自由党員は昨日我社員に物語れり。」

(『東京新聞』M30.10.8)

この記事に「諸氏の名を窃用し居るは例の運動費を取り出す」云々とあるのはともかく、以上のような浮説が出る中で「今日同県自由党員の石坂変節の輩を排撃するの気焰は復た尋常一様に非ず、殆ど之れを蛇蝎の如く惡み居れば、同県自由党員として何ぞ其の詆唾し措かざる処の石坂の跡を踐む者あらんや」と述べられていたことは、既に神奈川県において新自由党勢力が払拭され、同県自由党員のあいだに石坂一派の同輩を踏むまいとする空気が支配的であつた

ことを物語っている。それとともに、たとえ石坂一派が公同会の結成を機として神奈川県に同志を求めても、まず難しいといってよく、むしろそのかわりに反発を買うという厳しい現状があつたといえるだろう。

かくして神奈川県自由党では、1月24日の武相支部臨時大会から脱党者問題に取り組み、2月14日の関東自由党会臨時大会を経て、およそ全県規模で党の結束と「地盤」確保の運動を展開し、ついに新自由党勢力の排除に成功したのである。これにより、元来「自由党の鎮台」と称された自由党武相支部は、「其中堅」たる三多摩から多くの脱党者を出したにもかかわらず、再度その地位を揺るぎないものとしたといえよう。

5. むすび

以上のように、日清戦後の神奈川県自由党と題して、自由党武相支部の動向を中心に、(1)「戦後経営」問題をめぐる第九議會への対応、(2)明治28年通常県会に端を発した「治水費問題」への対処、(3)明治30年結成の新自由党勢力への対応、というそれぞれの問題を設定して述べてきたが、ここで本稿のむすびとして若干のことを付け加えておきたい。

まず、上掲(2)の問題に関して見てみると、日清戦後の神奈川県下にあつて頻著となつた「治水費問題」は、郡部での「河川派」と「山兵派」の対立を激化させ、神奈川県自由党の分裂をも誘引しかねないだけに、重大かつ深刻な問題であつた。そこで、同じく武相支部にあつて神奈川県自由党にも影響力ある三多摩自由党の領袖が、かかる両派の紛議を解決するために仲介の労をとり、その指導により両派は和睦するまでとなつた。しかしながら、実際問題として「治水費問題」が交渉の決着を見たのは、それより後の両派交渉会(明治29年10月3日)のことで、そこで最終的な「利害」の折り合いがつくことになる。これによって、日清戦後の神奈川県自由党は、いっぽうでは三多摩自由党の指導によ

りつつも、実質的には県下有力者間の交渉によって妥協を見る、いわば「地域利害」を媒介とした党派の結合によって成立していたことがあきらかになってくる。

かかる地方政党のあり方がなおいっそう鮮明となってくるのは、上掲(3)の問題が起こってからのことである。この問題が起こるにおよんで、自由党武相支部では、まず神奈川県自由党の分裂を回避せんとし、あわせて自由党本部の指導のもとに関東自由会との連携をとり、やがて明治30年3月14日の武相支部大懇親会を機に、県下における「地方の団結」を強化し、新自由党勢力(石坂昌孝一派)の侵攻を阻止する体制固めをした。これに対して、所謂脱党代議士を出した地域でも「四郡同盟会」なるものが組織され、各郡内の郷党的団結をまもる前提に立って、選出代議士への不信任が宣告されるまでとなった。また他の地域においても新自由党勢力の「地盤」浸潤を警戒する空気が強く、石坂昌孝らの遊説に際しては面会謝絶の態度をとるなどの徹底した姿勢で応じている。

日清戦後の神奈川県自由党にとってもうひとつの課題は、藩閥政府と肝胆相照らして提携を宣言した自由党を支持するか否かの問題であった。上掲(1)の問題のところで述べたように、明治28年12月1日の自由党武相支部大会において党本部に対する支持が決議され、これによって神奈川県自由党は事実上「民党」的立場を放棄したことになり、また後日の党大会では「戦後経営」問題に関する全権が代議士会に委任されたことで、第九議会に関する院外運動の余地はほとんどなくなった。

かくして神奈川県自由党では第九議会中には、党本部に対する追随の態度をもって、大勢を見る程度の対応しかできなかったことになるが、それでも議会終了後に「板垣の入閣」が実現するや、所謂「伊板内閣」を称して「吾国憲政未曾有の政党的内閣」と歓迎したことは注目にあたいする。

ここにおいて「民党」的立場を脱却した神奈川県自由党は、藩閥勢力(長州閥)との提携に

よって政党政治実現の第一歩を見出したのである。このことは、前掲(2)・(3)の問題で取り上げた「地域利害」・「地盤」という地方の自由的基盤に立脚した神奈川県自由党が、日清戦後を機に、藩閥・政党から成る一種の連合政権構想の下に政党政治実現を求めたことにもなり、またこれにより後年の立憲政友会内閣へと連なる政治路線と政党のあり方を見出すにいたったと見るのできるのである。

注 記

- 1) 坂野潤治：明治憲法体制の確立，東京大学出版会（1971）pp.178-180
- 2) 自由党党報，第98号（1895.12.11）p.38-39を参照
- 3) 神奈川県議会事務局編：神奈川県会史，第2巻，同議会（1953）p.407，p.416-417
- 4) 旧神奈川県三多摩地区は自由党の根拠地として知られ、中でも石坂昌孝・森久保作蔵・村野常右衛門の名は夙に知れわたっていた。当時、所謂「三多摩壮士」と親交のあった利光鶴松は「神奈川県ニハ関東自由党ノ大先輩タル石坂昌孝氏アリ、之レガ両翼ニ村野、森久保ノ両氏アリ、天下ニ有名ナル三多摩ノ健児アリ、一時ハ自由黨員ニアラザレバ、人ニシテ人ニアラズト云フノ盛況ナリ」（利光鶴松翁手記、小田急電鉄（1957）p.209）と述べ、三多摩自由党が神奈川県を自由党王国たらしめたものとしている。かかる三多摩自由党の勢力は、明治26（1893）年の東京府編入後も持続できたといえるが、いっぽうの神奈川県自由党としては三多摩分離により勢力低下は否めなかったはずである。それだけに神奈川県自由党にあっては、日清戦後にも三多摩自由党との関係強化をはかり、それまでの自由党王国を守る必要があったと見られる。
- 5) 色川大吉，村野廉一：村野常右衛門伝，民権家時代，中央公論社（1969）、色川大吉：流転の民権家―村野常右衛門伝，大和書房（1980）、渡辺獎：石坂昌孝の生涯（その4）；町田地方史研究，創刊号（1975，7）、沼謙吉：新自由党の結成；日野市史，通史編3，近代（1），日野市史編さん委員会（1987）
- 6) 拙稿：軍夫となった自由党壮士；地方史研究，第177号（1982，6）p.62-63
- 7) 自由党党報，第89号（1895，7，25）p.3
- 8) 新潮，第14号（1895，8）p.30-31
- 9) 新潮，第15号（1895，9）p.33
- 10) 自由党党報，第97号（1895，11，25）p.1-2
- 11) 新潮，第18号（1895，12）p.33-34
- 12) 自由党党報，第99号（1895，12，25）p.33
- 13) 田野倉仙蔵の出自・経歴については、拙稿：憲政党神奈川県支部の内訌および分裂について；経営情報科学，第3巻第2号（1990，3）p.159を参照されたい。本稿に引用した田野倉仙蔵日記資料は、神奈川県城山町在住の馬場厚氏所蔵になるものである。

- 14) 『田野倉日記』(明治29年)には『東京新聞』から得た外交・内政関係のニュースが記入してある。『東京新聞』は、明治28年12月18日に『めざまし新聞』を改題した自由党系の新聞である。同紙には、明治29年はじめに星亨直系の井上敬次郎が在社していたが、翌30年はじめには土佐系の小松三省・坂崎域らが実権をにぎり編輯にあたった。その後、31年10月19日に『人民』と改題し、社内改革によって竹越三叉が主筆となった。
- 15) 新潮, 第19号(1896, 2) p.11、同上, 第20号(1896, 3) p.7、同上, 第21号(1896, 4) p.12
- 16) 遠山茂樹, 安達淑子: 近代日本政治史必携, 岩波書店(1961) p.225
- 17) 新潮, 第24号(1896, 7) p.4
- 18) 新潮, 第19号(1896, 2) p.7
- 19) 政論雑誌『新潮』に関しては、拙稿: 軍夫となった自由党壮士; 地方史研究(1982, 6)、および内田修道: 神奈川県地方誌『新潮』と『進歩』の主張: 神奈川県史, 各論編1〔政治・行政〕, 神奈川県(1982)を参照されたい。なお、本稿で扱う『新潮』は、神奈川県立文化資料館および東京大学法学部明治新聞雑誌文庫の所蔵になるものである。
- 20) 22) 24) 新潮, 第21号(1896, 4) p.2
- 21) 官報, 第3835号(1896.4.15) p.234
- 23) 新潮, 第18号(1895, 12) p.2-3
- 25) 国立国会図書館憲政資料室所蔵
- 26) 軍夫「玉組」に関しては、渡辺欽城: 三多摩政戦史料, 日本産業新報社(1924)、佐藤孝太郎: 八王子物語, 下, 多摩文化研究会(1965)、拙稿: 軍夫となった自由党壮士; 地方史研究, 第177号(1982, 6)、沼謙吉: 軍夫玉組の悲劇: 日野市史, 通史編3, 近代(1), 日野市史編さん委員会(1987)を参照されたい。
- 27) 神奈川県会史, 第2巻, 神奈川県議会(1953) pp.356-366, pp.373-377, p.404
- 28) 29) 新潮, 第18号(1895, 12) pp.40-42、神奈川県会史, 第2巻, 同議会(1953) p.407, p.416-417
- 30) 『田野倉日記』(明治29年) 2月4日条には「本日本県郡部会原案執行の告示を出す」と記されている。
- 31) 内田修道: 帝国議会の開設と県政: 神奈川県史, 通史編4, 近代・現代(1), 神奈川県(1980) pp.525-532
- 32) 新潮, 第19号(1896, 2) p.26
- 33) 新潮, 第19号(1896, 2) p.26-27
- 34) 明治29年2月1日県会議員半数改選の結果、郡部においては自由党11名および改進黨5名が当選した。これにより郡部会の議席は自由党24に対して改進黨5となったが、河川派と山岳派の勢力関係は不明である。議員それぞれの出身地と選出基盤の分析・検討が必要である。
- 35) 新潮, 第20号(1896, 3) p.32-33
- 36) 明治29年3月15日には、その他に、県下の自由党員40余名が横浜太田鉄温泉に会し、臨時県会の役員候補者や諸般の協議をしていた(新潮, 第20号(1896, 3) p.33)。
- 37) 新潮, 第20号(1896, 3) p.35
- 38) 渡辺奨: 石坂昌孝の生涯(その4): 町田地方史研究, 創刊号(1975, 7) p.97-98
- 39) 渡辺欽城: 三多摩戦史料, 日本産業新報社(1924) p.207
- 40) 新潮, 第26号(1896, 10) p.35
- 41) 明治29年度郡部地方税支出予算では、土木費4,461円10銭2厘のうち、治水堤防費が3,845円41銭9厘(約86パーセント)であるのに対して、道路橋梁費は615円68銭3厘(約14パーセント)にすぎなかった。これに対して明治30年度郡部地方税支出予算では、土木費24,027円75銭3厘のうち、治水堤防費が3,807円12銭(約16パーセント)であるのに対して、道路橋梁費は20,220円63銭3厘(約84パーセント)と激増している。この事実をもって、明治29年11月開会の通常県会では、山岳派議員の要求が大幅に認められたことが明らかとなる。以上、神奈川県会史, 第2巻, 神奈川県議会(1953) p.407, p.440による。
- 42) 自由党党報, 第119号(1896, 10, 27) p.25
- 43) 沼謙吉: 森久保作蔵衆議院進出: 日野市史, 通史編3, 近代(1), 日野市史編さん委員会(1987) p.241-242
- 44) 渡辺奨: 石坂昌孝の生涯(その4): 町田地方史研究, 創刊号(1975, 7) pp.105-111
- 45) 46) 自由党党報, 第126号(1897, 2, 10) p.17-18
- 47) 自由党党報, 第127号(1897, 2, 25) p.17
- 48) 自由党党報, 第127号(1897, 2, 25) pp.18-20
- 49) 自由党報, 第127号(1897.2.25) p.20
- 50) 自由党党報, 第127号(1897, 2, 25) p.20-21
- 51) 色川大吉, 村野廉一: 村野常右衛門伝, 民権家時代, 中央公論社(1969) p.230-231、色川大吉: 流転の民権家-村野常右衛門伝, 大和書房(1980) p.196-197
- 52) 自由党党報, 第129号(1897, 3, 25) p.29-30
- 53) 色川大吉, 村野廉一: 村野常右衛門伝, 民権家時代, 中央公論社(1969) pp.237-240、色川大吉: 流転の民権家-村野常右衛門伝, 大和書房(1980) pp.204-206
- 54) 自由党党報, 第129号(1897, 3, 25) p.30
- 55) 新潮, 第35号(1897, 8) p.38-39
- 56) 官報, 4126号(1897.4.8) p.106-107
- 57) 前田蓮山: 「自由民権」時代, 時事通信社(1961) p.504-505
- 58) 本山幸彦: 政党政治の始動, ミネルヴァ書房(1983) p.162

【付 記】

本稿をまとめるにあたり、馬場厚氏(城山町史編纂委員)には、田野倉仙蔵日記資料の貸与など多くの御協力をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げます。